片 木 華 枝

Philo's Understanding of Moses as Prophet

Hanae KATAGI

One of Philo's apologetic and historical writings, *De Vita Mosi*, is regarded as the only treatise which shows his systematic understanding of Moses, and which expounds on the religious significance of Moses' life with a non-Jewish audience in mind. He highlights the four functional roles of Moses: 1) as king, 2) as legislator, 3) as high priest, 4) as prophet. Among these four offices, Moses 'necessarily' obtains the office of prophet in order to divinely guide the ordinary people who are singularly dependent upon common human reasoning. Divinely inspired prophecy communicates a realm of authority incomprehensible to common human rational. At this point, Philo clearly contrasts the providence of God expressed through prophecy to finite human reasoning and mind. According to Philo, such prophecy is classified into three types: that directly spoken by God with His prophet for interpreter, that revealed through question and answer, and that discerned by the inspired person. This essay, which hones in on the prophetic function of Moses, attempts to clarify both the interrelatedness and the cohesiveness of Moses' four-fold ministry as well as of his three-tiered prophetic activity.

はじめに

アレクサンドリアのフィロンが著した諸論考にはモーセに関する数多くの記述が存在する。それらの内、フィロンのモーセ理解が体系的に示されたほぼ唯一の作品⁽¹⁾と考えられているのが『モーセの生涯』(全二巻、以下『モーセ』と略す)である。フィロン著作の分類に於いて、今日「護教的及び歴史的著作群」の一つに数えられることもあるこの論考は、その内容的特質から、非ユダヤ人や或いは初学者に近い人々を念頭に置いて書かれたものと考えられるため、とりわけ(他のフィロン著作にも同様の側面があるにせよ)、例え自らの共同体に於いて自明と見做されることであっても、それが共同体を取り囲む世界の論理によっても又認められ、矛盾なく調和し得ることの立証を試みた論考の一つとも捉えることが出来るように思う。多くの研究者はまた、『世界の創造』の冒頭部がおもむろにモーセ以外の立法者とモーセの対比で始まり、二種の立法者の対比の仕方が『モーセ』二・四七―五一を想起させるものであることなどから、『モーセ』をフィロンの聖書解釈のいわゆる律法註解群や、より高次の段階にある律法の寓意的解釈群といった、律法の本格的な学びに入る前段階に位置するものと捉え、それらへの導入的役割を担っている⁽³⁾と見做している。本稿では、フィロンの聖書解釈の端緒であり且つモーセ理解の基礎的な一集成とも考えられる『モーセ』を中心に据え、フィロンが論考の第二巻冒頭で提示するモーセの四つの職務、即ち「王・立法者・大祭司・預言者」の内、預言者に焦点をあてながら、先ずは他の職務との連関の内にこれを考察することによって、その特性を引き出したい。次いで、フィロンが示す預言の三つの類型⁽⁶⁾、即ち(1) 神的な預言者である解釈者を通して神御自身から語られるもの、(2) 問いと答えから預言されること、(3) 神懸りになり自らを忘れた

状態のモーセ自身によるものをそれぞれ分析し、預言者としてのモーセに関するフィロンの理解の一端を明らかにすることで、後のキリスト教思想に対する影響を考察する足がかりを得たい。

一 モーセの四つの職務

預言者モーセが、同時に王・立法者・大祭司でもあるというフィロン独特の見解は、『モーセ』二・二一三の中に見出される⁽⁷⁾。フィロンによれば、モーセは王たること (βασιλικός)、哲学者たること (φιλόσοφος)⁽⁸⁾ のみならず、他の三つの能力、一つは「立法」(νομοθεσία) について、もう一つは「大祭司職」(ἀρχιεπισκοπή) について、最後に「預言」(προφητεία) について仕事を成し、それらの諸力を一人の人物の内に並はずれて示していると思われるのである。モーセが神の摂理によって (ἐπονοία θεοῦ) 四つの職務を一身に担い、更に各々の職務に於いて最高位を担う存在であることが、そこに明かされている。このような形で四つの職務が同一人物の内に兼ね備えられるということは通常起り得ず⁽⁹⁾異論が生じる可能性をフィロンは予め認識していたと考えられ、何故同じ一人の人物に全てのものがそなわっているのか、それが明らかにされねばならないと語りながら、続く二・四以下の節で四つの職務の連関について述べる。先ず王と立法者であるが、

王にとって、すべきことを命じ、してはならないことを禁ずるのは相応しい。だが、成すべきことの命令と成さざるべきことの禁止は、法に固有のものである。その結果端的に、一方で王は生ける法 (νόμος ἐκταής) であり、他方法は正しき王 (βασίλειος δίκαιος) となるのである。

(二一・四)

ウルフソン (H. A. Wolfson) は両者を同一の働きの二つの相に過ぎないものと捉えているが、フィロンが「生ける法」という語を用いる背景には、それ以上に、ストア派及び中期プラトン主義的文脈への意識が感じられる。¹¹⁾ 眞の立法者である神に由来する律法と同じく、自然法は「神が創造した世界の」法であり、それ故に同一の神的根源を持つ。あらゆる者に対して普遍的な価値を有する、その自然法に従って生きること、自然法を模倣する者としての自らを示すことにより、その者の生は「生ける法」としての意義を帯びるのである。フィロンはストア派に於ける賢者の理想を族長たちにも投影しており、彼らを「生ける理性的な法」(ἐπιθυμῶν καὶ λογικῶν νόμων) と呼ぶこともあるが、ヘルモン (A. C. Geljon) が指摘するところでは、それが王と関連するのは、モーセに限られる。又、ナイマン (H. Najman) の見解に従うならば、モーセが神から授けられ人々に与えた律法を、フィロンは（本来は記され得ない）自然法の、完全なる模倣として解した可能性がある。そしてその律法には、モーセの規範的な「生涯」そのものが生ける法として含まれているのである。

さて、この王且つ立法者は、人間に関することのみならず、神に関することをも共に考えねばならない。神的深慮なくして、王及び従属するものの諸事は立ち行かないからである。そこで必要とされたのが第一の祭司職であり、¹⁵⁾ モーセは彼自身と指揮下にある者たちのために祈るのだが、この王の職務と祭司職との結びつき、或いは人的事柄と神的事柄への配慮は、元来は不即不離のものであった。¹⁶⁾ グッドイナフ (E. R. Goodenough) が提示するピュタゴラス派に属するとされるディオトゲネスの論考内にも王の三つの責務の一つに司祭職が含まれ、神と王・世界と国家、神と世界・王と国家という四者二組の類比の内に、その必然的結びつきが語られている。神的な諸事に関わりそれに倣うことによって人的な諸事へとそれらを適用させる、或意味に於いて仲介者の姿を持つ精神的指導

者の姿は、フィロンが語る王且つ立法者且つ大祭司としての理想にも近いものがあるように思われる。さて、では上記三つの職務と預言者のそれは、一体どのようにに関連するのであろう。フィロンは預言者について次のように語る。

しかし、王、立法者、大祭司である者にとつても、人間に関する、及び神に関する無数のことが明らかでないで——何となれば、例えそのように恵まれた境遇の豊富な分け前を有していても、生まれながらに死すべき者なので——、「モーセは」必然的に (ἀνεγκλίος) 預言者職を得た (ἐτύχευε)。勘考によつては (λογισμῶς) 捉えることの出来ないものを、神の摂理によつて (ἐπονοίᾳ θεοῦ) 見出すことが出来るように。何となれば、知性が (οἱ νόοι) 及ばないものへと、預言は先んずるからである⁽¹⁹⁾。

(二・六)

預言者としての職務がこれまでの三者と趣を異にする点として、それが「必然的に」得られたものであるということ、そして、知性 (≡ 勘考) の域を超えたところに預言 (≡ 神の摂理) は到達するということを挙げられるように思う。

フィロンは、前三職が神からモーセに授けられ、それらが担われるようになったことと、彼の諸徳の関連とを記している。モーセが神に王の職務を授けられたのは、彼が常に示し続けた徳 (ἀρετή) と善美 (καλοκαγαθία) と、あらゆる者への善意 (εὐνοία) の故であった⁽²⁰⁾。又、立法者にとつて必要とされた、人間を愛すること (ἀγαπάειν)、正義を愛すること (τὸ φιλοδικαίον)、善を愛すること (τὸ φιλόγαθον)、そして悪を憎むこと (μισοπονηριον) をモーセは併せて捉え、それらを法の内に定めたが、モーセ以外にここへ到達した者はいない⁽²¹⁾。更

に、祭司職に最も必要とされる敬虔 (*vödgæu*) の故に——敬虔は時に徳の内でも最も優れたものと見做される——及び哲学により資質を養うことによつて、モーセはその職務に与る名誉を得たのである。⁽²³⁾ これらとは対照的に、預言者に関しては、少なくとも『モーセ』中には、同様の諸徳の列挙は認められないように思われる。⁽²⁴⁾ これを、どのように解すれば良いだろうか。フェルトマン (*L.H.Feldman*) は、モーセの四つの職務の内前三者を「理性的 (*raional*) 権能」とし、最後のものを「必然的なもの」と呼んで両者に一定の区別を設けているが、それに従い次のように言うことは可能だろうか。つまり、モーセが諸徳に應じて授けられた各理性的権能の先——死すべきものが及ぶところから「必然的に」得られた預言者としての職務こそが、前三者に先んじて根本的且つ総合的な性質を持つものであり、次いでモーセの有する各徳性に應じた職務が授けられることによつて、それらは王・立法者・大祭司の各表象を採ったのではないか。そしてこのような、必然的なものと理性的なものの協働からこそ、初めて偉大なる指導者はその姿を現したのだ、と考えられはしないだろうか。この問題に関しては今後も十分に検討していかねばならないか、例えばウルフソンは、フィロンは「預言者」という語を、立法者や祭司とは別個の何かというよりは寧ろ、立法者や祭司がそこに含まれるべき総体的な語として用いていることを示唆しており、立法者を預言者の下位区分とするようである。又リールマン (*J.Lieman*) は、フィロンにとって預言者職は、モーセのイスラエルに対するあらゆる役割の基盤であつたと見做す。

このような王・立法者・大祭司・預言者の四職は、モーセに於いて完全なる調和を実現しているのである。

四つの能力の統一は、美しく完全に調和がとれている。何となれば、諸力は相互に織りなして絡みあつており、益を受け且つ返しながら、共に踊るからである。「諸力は」汚れなきカリスたちを模倣して、不動の⁽²⁹⁾

自然法がそれらの離れることを禁じている。その能力を指して次のように言うのは正しかろう。つまり、「それは」諸徳を指して慣習的に言われてきたことだが、一を有するものは全てを有する⁽³⁰⁾のである。(二・七)

以上により、モーセが一身に担う四つの職務とその結びつきを概観した。この連関の必然性に関する記述は、預言者としてのモーセが本格的に論じられる『モーセ』二・一八八以下に先立って、二・一八七に於いても再び繰り返されている。ここでは、「最も完成した指導者に」付随していなくてはならないものとして諸力が語られ、王・立法者・大祭司としてのモーセに続き、最後に、モーセが最も名立たる預言者となったことが、明らかにされる。

二 『モーセ』に於ける預言の定義と三つの類型

預言者としてのモーセを論ずるにあたり、『モーセ』二・一八八に於いて、フィロンは預言の大前提とそれが持つ三つの類型を、次のように語る。

私は知らないわけではない。聖なる書物に於いて記載された限りの一切のことが、彼〔モーセ〕を通して預言された預言(ὑποφωτισμοί)であると。私はより彼本来のことを(τὰ ἰδιαιτέρεα)語るつもりである、最初に以下のことを言って。「神の」御言葉の中でも、或ものは神的な預言者である解釈者を通して(ὁ ἐρμηνεύων τοῦ θεοῦ ὑποφωτισμοί)神御自身から語られるものであり、或ものは問いと答えから預言されることであり、或ものは神懸りになり自らを忘れた状態のモーセ自身によるものである(τὰ ὅτι προσώπου Μωυσεως ἐπιθεωρούμενος καὶ

ἐξ αὐτοῦ κερταυχέμενος)。

(二・一八八)

以上より明らかなのは、預言とは、何よりも先ず聖書に記されたことを指すということだ。それはまた、モーセを介することにより初めて公にされた法でもある。次に、フィロンは「より彼〔モーセ〕本来のこと」として、聖書の預言には三つの類型があることを提示する。それは即ち、(1) 神的な預言者である解釈者(ἐρμηνεύς)を通して神御自身から語られる預言、(2) 問答による預言、(3) 神懸りになり自らを忘れた状態のモーセ自身による預言である。この預言の三類型はまた、フィロンの律法の寓意的解釈群に属する『夢』に見られる(一・一、二・一四)、夢の三区分を想起させるものでもある。³¹⁾ これら三つの類型の内、第一の預言は次のような性質を持つ。

最初のものは、絶対に且つ完全に神的な徳の実例であり、神的徳とはつまり、慈悲深く善いことを行うのである。「徳を」通して、一方で全ての人間を善美に向けて準備し(ἀρετὴν)、他方、とりわけ神に奉仕する氏族に、「神が」幸福へと導く道を切り開く準備をするのである。(二・一八九)

論文

『モーセ』を一貫して或いは友好的な異教徒へ向けて書かれた著作と考えるグッディナフに従うならば、この記述内には、異教徒をユダヤ教へと引き寄せるためのフィロンの巧妙な言い回しが見出される。つまり、預言の第一の類型がその実例である神的な諸徳により、あらゆる人間が善美へ向けて向上する可能性をフィロンは容認しているものの、依然として、神が切り開く幸福への道は、彼と同じ教えに従う同胞にのみ備えられることを示すからである。しかしながらフィロンは、神の直接的発言とモーセの関連をこれ以上深く論じようとはせず、用心深くこれ

が議論から外されるべきであることを主張する。

何となれば、「余りにも」大きいので人間の誰かによって讀えられることが出来ず、辛うじて、天、世界、全自然によって相応しく賞賛されたからである。更に加えて、あたかも解釈者を介して (ὁὖ ἐρμηνεύς) のように語られる。解釈と預言は、相違するのである (ἐρμηνεία δὲ καὶ προφητεία διαφέρουσι)。 (二・一九一)

フィロンのこの一文には、二つの問題が認められよう。先ず、預言の第一の類型がこのような形で議論の対象から除外されること、そして、フィロンにより ἐρμηνεία と προφητεία が相違するものと見做されていることである。

グッドイナフは、⁽³³⁾フィロンが ἐρμηνεία と προφητεία の区別によって意味したかもしれないことを理解するのは不可能であるように思われると語り、その理由として、(1) ここでフィロンがそれを説明していないこと、(2) フィロン著作の他の箇所⁽³⁴⁾に於いて、両者は完全なる同義語であることを挙げる。⁽³⁵⁾一方ウルフソンは二つの語の厳密な意味と使い分けに留意し、これを説明しようと試みる。⁽³⁶⁾プラトンをも引き合いに出しながらウルフソンが語るところ、ギリシアに於いては、「予言者」という語は、自身が託宣的能力を保有していると信じられている人物に用いられるのであり、それとは対照的に、「解釈者」(ἐρμηνεύς) という語は、託宣を解釈する人物を意味する。⁽³⁷⁾この用法をフィロンの ἑρμηνεύς と ἐρμηνεύς の解釈に適用するならば、二語の使い分けに関するフィロンの意図を推し量ることは可能であるように思われる。ただしウルフソンが同時に指摘する通り、聖書に於いては、このような意味の区別は見られない。と言うのも、神的な靈感の下、神からの教えを受け取った者は、それを又明瞭で分かりやすい言語でもって人々に伝えるのであり、同一の人物によってそれらは成されるからである。預言者は神の解釈者

(或いは通訳者)ではあるが、他の預言者のそれでは無いからだ。彼の解釈に従うならば、二者の相違は『モーセ』の想定される読者へ向けて提示されたと考えられるかもしれない。

他方、ウィンストン (D. Winston) の見解では、フィロンが語る二語の相違は、より重要な展開を含むものとなる。ウィンストンは『モーセ』に於いては語られることなく省略された預言の第一の類型を「解釈的 (或いは知性的) 預言」と捉えており、この形態に関する独立した記述がフィロンによって示されることはないが、その本質は十戒授与の叙述にあるとする。そして、シナイ山で神御自身により啓示された十戒が、忘我の状態にある預言者モーセではなく「解釈的」預言者モーセによってもたらされたものであることを示すために、ἐμπνεύειν と προφητεύειν の相違が挿入されたことを暗示している。³⁹⁾ ウィンストンは、この「解釈的預言」に対照させる形で預言の第三の形態を「忘我的預言」と呼んでおり、その預言が、預言者を受動的な器とし知性が絶対者の内に完全に取り入れられた状態を象徴するものであることを示している。⁴⁰⁾ 一方で解釈的 (知性的) 預言に於いては、モーセは受動的に受容するのではなく預言者の理性は靈感に明け渡されず、魂は上昇し、神的啓示を解釈するものとなるのである。ウィンストンによるこの預言の二分類は大変示唆的なものではあるが、その妥当性を問う際には、預言と知性 (或いは解釈) の関係性をより一層厳密に捉える必要があるように思われる。そのため、この問題については今後の課題とし稿を改めたい。では次に、フィロンによって分類された預言の第二の類型と第三の類型を見よう。

二・一 モーセの預言——問いと答えによる預言

フィロンによって預言の第二の類型とされたのは、モーセが神に靈感を与えられることによって尋ね、神が言葉と答えによって一部を分与し預言するという、問答の性質を持つものである。これをフィロンは、「混じり合い協

働するものであり、探し求めていることについて預言者が問いを出し、「神が」答えて教える」(二・一九〇)と定義づけている⁽⁴¹⁾。『モーセ』に於いては、危機の中で神から応答を得たこの類型の預言に関する四つの事例が聖書中より選ばれているが、グッドイナフによれば⁽⁴²⁾、それらは「明らかな意図をもって」提出されたものである。と言うのも、フィロンは四つの題材を選択し⁽⁴³⁾この形態の預言を列挙するのであるが、一群の題材は全体として、異教徒の読者にとっては早いうちに明らかにされねばならないユダヤ教の側面を説明しようとの試みから成り立っているからである⁽⁴⁴⁾。例えば、月遅れの過越の祭りについて語る中でフィロンは聖書に柔軟な敷衍を施しており、居住地が遠方であることによって奉げ物から遠ざけられている者にも、ひと月遅れで過越の祭りを祝うことが許されると語る神を描写している⁽⁴⁵⁾。

二・二 モーセの預言——憑依状態のモーセ自身による預言と、モーセの最期

この第三の預言は、憑依の状態にある⁽⁴⁶⁾モーセ自身によって成される。これは立法者に課されるものであり、神が予見能力の一部をその人物に分ち与えて、来るべきことを預言するのである⁽⁴⁷⁾。又、語り手の憑依状態が(ἐνθουσιασμός)現れ、それに従って最も厳密な意味で預言者が考えられた、とフィロンは記す⁽⁴⁸⁾。預言者は神的な啓示の受動的媒介者となるのである。なお、グッドイナフやウィンストンも指摘する通り、この第三の憑依状態の預言は、未来を正しく予見するモーセの能力を説明するためにのみ、引き合いに出される点に留意が必要である。問答による預言の時と同様、フィロンはここでも四つの例を聖書より選び出し論じている⁽⁴⁹⁾。この憑依の状態により、モーセは、イスラエル人の救済を、紅海に於けるエジプト軍の滅亡を予見した。驚くべき二倍の量のマナが六日目に降り、そして七日目にはそれが全く得られなくなることを、金の子牛事件の際のレビ人の忠誠を、地震及び天からの

炎による背教者の滅亡を預言し、そして最後に、彼自身の死を予見したのである。

預言者としてのモーセの職務に関する論述、及び『モーセ』全体の最後に来るのは、申命記三三、三四章を想起させるモーセの最期の記述である⁽⁵¹⁾。モーセは、自身の死を預言として予見したのだが、その死は、一なる知性への変容であった。

時が経って、ここから天へと旅立とうとしていた時、死すべき生を後にして不死にされようとしていた時に、父によって「モーセは」呼び戻され、「父は」身体と魂、二つのものであった彼を、一なる性質へと還元して (εις μονάδος ἀνεστρουγείου φθαρῖν)、全てをひとまとめにして、太陽のように最も光り輝く知性へと、変えたのである (μεθαρμόςμενος εἰς νόον ἡλιουδέστερον) ……。⁽⁵²⁾

(二・二八八)

結びにかえて

以上で、モーセの預言者としての職務、及び預言の三つの形態について概観した。考察の過程で明らかになったことを纏めると、(1) モーセの四つの職務の内、預言者の職務は、勘考によつて捉えることの出来ないものを神の摂理によつて見出すことが出来るよう、「必然的に」得られたものである。何故ならば、知性が及ばないものへの預言は達するからである。(2) 預言者の職務は、立法者や祭司をもそこに含む総体的且つ先行的なものである可能性がある。(3) 預言とは、モーセを介して聖書に記された一切のことを指す。(4) 預言には三つの類型が存在する。即ち、神的な預言者である解釈者を通して神御自身から語られるもの、問いと答えから預言されること、霊

感を受け憑依状態になったモーセ自身によるものである。(5) これらの内、第一の類型は、或いは十戒の授与に関わる可能性を持ち解釈者を介して語られるものであるが、フィロン自身によって明らかにされることはなく、第二の類型は協同する性質のものであり、又、第三の類型に現れる憑依状態に従って、最も厳密な意味で預言者が考えられた。(6) モーセは自身の死を預言として予見したが、その死は、一なる性質をもつ太陽のように光り輝く知性への変容であった。

註

(1) 『賞罰』五三―五六にも、既に論じられたことの要約と捉え得る表現の仕方、モーセの生涯、及び『モーセ』第二巻冒頭で示されるものと同一の、モーセの四つの能力に関する言及が存在する。

(2) J. R. Royse, “The Works of Philo”, *The Cambridge Companion to PHILO* (New York: Cambridge University Press, 2009), pp. 50-51. フィロンの著作は、伝統的に大きく(1) 聖書註解、(2) 護教的・歴史的著作、(3) 哲学的著作の三つに分類され、この内、聖書註解は更に、問答、寓意的解釈群、律法註解群の三部分から成っている。『モーセ』は、これらの内の何処に位置付けられるかを巡って長年議論が行われている論考である。『モーセ』は、コーン(L. Cohn)とヴェントラント(P. Wendland)による校訂本の中で律法註解群の『ヨセフ』と『十戒総論』の間に置かれたが、方法論が他の律法註解群の諸論考と異なるため、それらと調和する要素はあるもののそこに属さない独立した書物と見做されることが多い。ロイス(Royse)によると、現時点での統一見解に於いては『モーセ』は「護教的及び歴史的」著作群に属する。グッドイナフはこの論考を「友好的な異教徒」に向けられた「いま一つのユダヤ人のための弁明である」と常にみなされている」²⁶。A. C. Geijon, *Moses as Example: The Philonic Background of Gregory of Nyssa's De Vita Moysis* (Diss. Leiden, 2000), p. 31. 他、E. R. Goodenough, “Philo's Exposition of the Law and His De Vita Moses”,

Harvard Theological Review 26 (1933): pp. 109-125, E. R. Goodenough, *An Introduction to Philo Judaeus* (New Haven: Yale University Press, 1940; グッドイナフ『アレクサンドリアのフィロン入門』(野町啓・兼利琢也・田子多津子訳、教文館、一九九四年)三―四、六二―六六頁。引用部六二頁、K. Schenck, *A Brief Guide to Philo* (Westminster: John Knox Press, 2005; ケネス・シェンク『アレクサドリアのフィロン―著作・思想・生涯』(土岐健治・木村和良訳、教文館、二〇〇八年)三〇―四六頁を参照。

- (3) フィロン著作群に於ける『モーセ』の位置づけについては、平石善司『フィロン研究』(創文社、一九九一年)二九―三〇頁、グッドイナフ(一九九四)六二、六五―六六頁、フィロン『世界の創造』(野町啓・田子多津子訳、教文館、二〇〇七年)六七頁、脚注二(三)、シェンク(二〇〇八)五三、脚注(五三)、同一八六―一八八頁、Gellon (2000), pp. 32-37, 41, D. T. Runia, *Philo of Alexandria: On the Creation of the Cosmos according to Moses. Introduction, Translation and Commentary*, Philo of Alexandria Commentary Series 1 (Leiden: Koninklijke Brill NV, 2001; Atlanta: Society of Biblical Literature, 2005), p. 1などを参照。ヘルヨンによれば、哲学の諸学派に於いては註解を伴う本文の研究に入る前段階としてその哲学者の生涯が読まれるが、『モーセ』にも、同様の性質が見られる。

- (4) 『モーセ』二・二三。

- (5) 現在『モーセ』に示される四つの職務の連関と各職務の特性を考察する過程にあるため、既に考察を行った王・立法者・大祭司に引き続き、本稿に於いては預言者に焦点を絞りたい。

- (6) 『モーセ』二・一八八。

- (7) テクストとして使用したのは、

L. Cohn, P. Wendland, et S. Reiter, and I. Leisegang (ed.), *Philonis Alexandrini opera quae supersunt* (6 vols. ; Berlin: Georg Reimer, 1896-1915; 1962). 本稿では PCW と略す。

参考文献として用いたのは、

F. H. Colson, G. H. Whitaker and R. Marcus (tr.), *Philo in Ten Volumes* (and Two Supplementary Volumes), (Loeb classical Library, London-Cambridge Mass., 1929-62). PLCL と略す。

Leopold Cohn, Isaac Heinemann et al. (ed.), *Philo von Alexandria: die Werke in deutscher Übersetzung*, 7 vols. (Breslau: M&H

Marcus Verlag, Berlin: Walter de Gruyter, 1909-64). PCH と略す。

Roger Arnaldez, Jean Pouilloux, and Claude Mondésert (ed.), *Les œuvres de Philon d'Alexandrie* (Paris: Cerf, 1961-92). PAPM と略す。

日本語訳は原則として拙訳であるが、先行する邦訳が存在する場合にはそれに従い、その旨付記した。

- (8) この二つの能力の内、「哲学者」は「王」と強く一つに結ばれ、「王」の職務内に集約されるものと推察される。と言うのも、フィロンはこの一文の直前に、プラトン『国家』第五卷四七三Dの有名な一節からの援用、「何となれば、幾人かが外的外れでなく言うように、もし王が哲学するか哲学者が王となるならば、そのようにしてのみ国家はより良きものへと進歩し得るからである」という一文を挿入しているからである。

- (9) フェルトマンは、ヨセフス『ユダヤ古代誌』一三・二八八―九二を引きあいに出しながら、これを例証する。L. H. Feldman, *Philo's Portrayal of Moses in the Context of Ancient Judaism* (Notre dame, Indiana: University of Notre Dame Press, 2007), p. 282.

- (10) H. A. Wolfson, *Philo: Foundations of Religious Philosophy in Judaism, Christianity, and Islam*, 2 vols. (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1947), 2. 17.

- (11) フィロン著作に於ける中期プラトン主義⁴及びストア派の役割については、J. M. Dillon, *The Middle Platonists: 80 B. C. to A. D. 220* (Ithaca: Cornell University Press, 1996), pp. 114-83., R. A. Horsley, "The Law of Nature in Philo and Cicero", *Harvard Theological Review* 71 (1978), pp. 35-59 など⁵を参照。

- (12) 『アブラハム』五。

- (13) Geljon (2000), p. 30.
- (14) H. Najman, *Seconding Sinai: The Development of Mosaic Discourse in Second Temple Judaism* (Leiden: Brill, 2003; Atlanta: Society of Biblical Literature, 2009), p. 74.
- (15) 『モーセ』二・五。
- (16) グッドイナフは、フィロン自身もそれを知っていたことを、『出エジプト記問答』二・一〇五を引用しながら示す。
E. R. Goodenough, *By Light, Light: The Mystic Gospel of Hellenistic Judaism* (New Haven: Yale University Press, 1935; Amsterdam: Philo Press, 1969), p. 189.
- (17) ストバイオス『精華集』四・七・六一、C. Wachsmuth, O. Hense (ed.), *Ioannis Stobaei Anthologium*, (Berlin: Wiedmann, 1884-1912), Book IV, vii, 61-62, vol. II, p. 265.
E. R. Goodenough, "The Political Philosophy of Hellenistic Kingship", *Yale Classical Studies* 1 (1928), pp. 66-68. の特こ p. 68 を参照。
- (18) 軍事上の指揮、法律上の管理、司祭職。
- (19) 本稿では、*λογισμός* に「勘考」を、この文脈での *νοός* に「知性」を充てたが、各語の適切な訳語については今後十分に検討していきたい。
- (20) 『モーセ』一・一四八。
- (21) 『モーセ』二・八一一。
- (22) 『アブラハム』六〇。
- (23) 『モーセ』二・六六。
- (24) 但し、『十戒総論』一七五に於いては、預言者の内最も完全な者（モーセ）が、神的な霊で満たされ神の聖なる発言の解釈者となるべく選び出されたのは、彼の優秀さに応じてのことであると記される。他に、『律法詳論』四・一

九二も参照。

- (25) Feldman (2007), p. 282.
- (26) フィロンに於ける「必然的に」の意を明らかにするために、今後、ἐνύκηνと νόος の関係についてはプラトン『テイマイオス』に見られる両者の議論との比較考察を行いたい。またアリストテレス『形而上学』第五卷五章に於ける「必然」とフィロンのそれに関する比較検討も、併せて課題としたい。
- (27) Wolfson (1947), 2. 17.
- (28) John Liernan, *The New Testament Moses* (Tübingen, Germany: Mohr Siebeck, 2004), p. 45.
- (29) カリスの比喩は、通常は「三」と共に用いられる。
- (30) デイオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』七・一二五を参照。有徳なる者に関するストア派の主張。
- (31) PCH, 1. 341, fn. 2, PAPM, 20. 274, fn. 2, Wolfson (1947), 1. 186. 参照。夢は、(a) 神から直接もたらされる夢、(b) 知性が神と調和してはたらき、やや謎めいた仕方で将来の出来事を明らかにするもの、(c) 魂自身によって誘発されることでもたらされる夢、の三つの範疇に分けられるが、純粹に神的なもの——協同する性質を持つもの——預言者、或いは魂の方に重点が置かれているもの、というその分類の〈仕方〉に限って、預言の三形態との間に類似性が見出せると言い得るかもしれない。但しグッドイナフはこの比較を、「興味深いが啓発されるものではない」としている。Goodenough (1935; 1969), p. 193, fn. 70.
- (32) Goodenough (1935; 1969), p. 192, fn. 67.
- (33) Goodenough (1935; 1969), 193, fn. 70.
- (34) 『神の不動性』一三八、『劣者の奸計』三九、『神のものの相続人』二五九、『改名』一二六、『律法詳論』三・七、四・四九、『ガイウスへの使節』九九、『賞罰』五五。
- (35) 例えば、フィロンの護教的及び歴史的著作群に属する『ガイウスへの使節』九九を見ると、「神的な事柄の解釈者

「ἐμπνεύς」にして預言者である者」という一文の中に、類義語として並べられた προφήτης と ἐμπνεύς を確認することが出来る。

(36) Wolfson (1947), 2. 41-42.

(37) 『ティマイオス』七E—七Bに於いては、狂気の中にある者の「予見」・「神懸り」と、正気の者の成すその「解釈」は、分けて考えられる。ただしこの箇所では、ウルフソンが指摘する通り、予見者が εὐαγγέλιος と呼ばれ、προφήτης という語は寧ろ解釈者の種族の方に充てられていることに、留意が必要である。しかしながらこれらの語に厳格な用法が存在したわけではないようであり、他方で、『バイドロス』二四四Bの中では、プラトン自身、ピュテアに προφήτης の語を充てている。尚、七十人訳聖書や新約聖書に於いては、προφήτης が預言を指すのに対し、λατρεῖον μωυ は偽預言者や或いは異教の占い師にのみ用いられるという区別が存在する。フェルトマンによれば、神的意思を明らかにする者に προφήτης の語を充て、異教徒の予言者（占い師）に言及する際 μωυς 及びその同源の語を用いるという点で、フィロンも七十人訳聖書の用法を踏襲している。織田昭編『新約聖書ギリシア語小辞典』（教文館、二〇〇二年）λατρεῖον μωυ の項、Feldman (2007), p. 304 を参照。

(38) D. Winston, “Two Types of Mosaic Prophecy According To Philo”, *Journal for the Study of the Pseudepigrapha* 4 (1989), pp. 49-67.

(39) Ibid., p. 50 を参照。

(40) Ibid., p. 54, p. 60 などを参照。ただし、アブラハムなどの場合と異なり、モーセの知性は神的な霊へと完全には明け渡されない。

(41) ウィンストンによれば、この問答形式の預言はモーセの神懸り状態が暗示されないことから「知性的預言」の実例に含まれることとなる。Winston (1989), p. 50. 但し、『モーセ』二・一九二を考慮に入れるならば、その判断が妥当であるか否かについては今一度検討が必要であるように思われる。

- (42) Goodenough (1935; 1969), p. 193.
- (43) (1) 主の名を冒瀆する者——レビ記二四・一〇—二三、(2) 安息日を破った者——民数記一五・三二—三六、(3) 月遅れの過越の祭り——民数記九・一—四、(4) ツェロフハドの娘たちの直訴——民数記二七・一—二。表題は、『七十人訳ギリシア語聖書』創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記(秦剛平訳、河出書房新書、二〇〇二—二〇〇三年)による。
- (44) Goodenough (1935; 1969), p. 195. 参照。
- (45) 『モーセ』二・二三—三〇。
- (46) 『神のものの相続人』二四九—六六、『律法詳論』四・四八以下を参照。
- (47) 『モーセ』二・一九〇。
- (48) 『モーセ』二・一九一。
- (49) Goodenough (1935; 1969), p. 195, Winston (1989), p. 56.
- (50) (1) エジプト人たちの滅亡——出エジプト記一四—一五、(2) 鶉とマナー——出エジプト記一六、(3) レビびとの熱心と忠誠——出エジプト記三二、(4) コラの反逆——民数記一六。
- (51) 『モーセ』二・二八—二九二。
- (52) ἱερεῖς οὐκείναιについては、今後適切な訳語を検討していきたい。